

習熟度別指導の現状

● 習熟度別指導の現状

- 習熟度別指導では、習熟の程度が同程度の児童生徒で小集団を編成します。

それぞれの集団に応じた指導方法や内容を工夫することによって、効率的・効果的で、きめ細かな指導が可能となります。

- 文部科学省は「平成19・20年度全国学力・学習状況調査追加分析報告書」の中で、習熟度別指導の時間を多く行っている学校の状況について、次のように示しています。

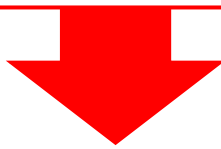
- 習熟度別指導の時間を多く行っている学校の方が、学力下位層が少ない。
- 習熟度別指導の時間を多く行っている学校の児童生徒の方が算数・数学に対して、「よく分かる」と肯定的な解答をしている。

習熟度別指導の頻度と算数・数学A問題における学力層Dの児童生徒

習熟度別指導の頻度	学力層Dの児童生徒が少ない学校		算数・数学の授業がよく分かる児童生徒	
	小学校	中学校	小学校	中学校
年間の授業のうち、およそ4分の3以上	58.6	59.3	58.6	59.3
習熟度別指導は行っていない	52.3	53.2	52.3	53.2

(平成19・20年度全国学力・学習状況調査追加分析報告書 文部科学省)

※ 学力層D：算数・数学A問題の正答数の多いものから順に約4分の1ずつA,B,C,Dに分類したとき、最も正答数が少ない分類にあたる。



- 習熟度別指導は、学力に課題のある児童生徒の学力向上に効果があると考えられます。学習指導要領においては、習熟度別指導について次のように示しています。

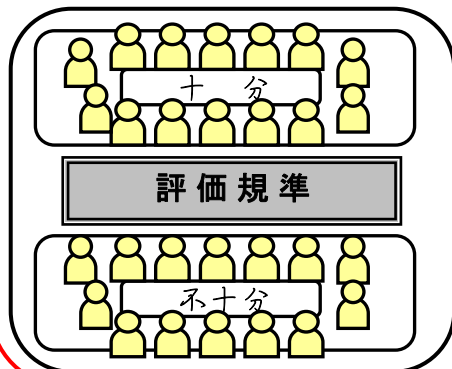
各教科等の指導に当たっては、児童が学習内容を確実に身に付けることができるよう、学校や児童の実態に応じ、個別指導やグループ別指導、繰り返し指導、学習内容の習熟の程度に応じた指導、…(中略)…指導方法や指導体制を工夫改善し、個に応じた指導の充実を図ること。 [小学校学習指導要領第1章第4(6) 中学校は(7)]

●習熟度別指導の効果

- 評価規準を基に、学習内容の習熟が十分な児童生徒と、不十分な児童生徒が、それぞれ相当数の集団を形成する場合に実施すると効果的です。
- 学級や学年集団の習熟度に関する分布は、ア、イ、ウの三つの場合が考えられます。それぞれの分布に応じて学習内容を次のように考えていきます。
 - ・学級で習熟度別指導に取り組む場合には学級担任と少人数指導担当で、
 - ・学年で取り組む場合には学年担任と少人数指導担当で、それぞれの習熟度に合わせて学習内容を次のように考えていきます。

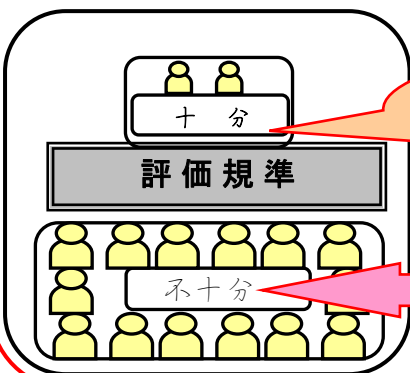
児童生徒の学習状況と習熟度別指導の類型

ア 習熟が十分、不十分な児童生徒が相当数の場合



◆アのように、評価規準をもとに、学習内容の習熟が十分な児童生徒と、不十分な児童生徒が、それぞれ相当数の集団を形成する場合に実施すると、より効率的です。

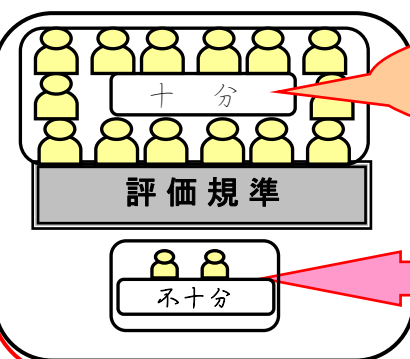
イ 習熟が不十分な児童生徒が多い場合



習熟が十分な児童生徒には、補充・発展的な内容を取り扱う。

ほとんどの児童生徒の習熟が不十分な場合には、補充的な内容を中心に。

ウ 習熟が十分な児童生徒が多い場合



習熟が十分な児童生徒には、発展的な内容を取り扱う。

習熟が不十分な児童生徒には、個別に補充的な内容を習熟させる。

●習熟度別指導が必要な場面

- 学習内容の習熟の程度に大きな差が生じることが予想される場合です。

習熟度別学習を実施する学習内容の選定

- ① 児童生徒の学習内容の習熟の程度を、データをもとに分析しましょう。

★学習内容の習熟の程度を把握するためのデータの例

- ★学力検査など学年の学習内容の総括的テスト実施結果
- ★学期や単元終了後に行う総括テスト実施結果
- ★学年又は学級が独自に行っているミニテストの累積結果
- ★実施単元に関連する既習単元の学習内容習得状況調査等

- ② データをもとに、つまずきとその原因について分析し、解消するための習熟度別指導計画を作成します。

調査問題の解答用紙から

- ① 解答に至った児童生徒の考えの道筋をたどる
→ 無答については、面談調査等を実施する。
- ② つまずいた原因を調べる。
→ 資質・能力の不十分さから分析する。
- ③ つまずきが発生した既習学習の不十分さを分析する。

●習熟度別指導の指導段階と指導方法

- ① 習熟度を把握するデータをもとに、つまずきの原因を明らかにしましょう。

①つまずきの原因を明らかにする

学習の習熟度を図るデータをもとに分析する。

追究の見通しが持ていない

見方・考え方が応用できていない

技能の定着が不十分である

知識や情報が不足している

つまずきの原因に対応するために、
②どの指導段階で、③どのような指導方法で習熟度別指導をすればよいか検討する。

- ② どの指導場面で、習熟度別指導を取り入れるかを検討しましょう。

②どの指導段階で

既習の振り返りを重視する場合

- ◆ 導入段階から
- ◆ 展開段階前半から

学習状況を重視する場合

- ◆ 展開段階から

定着・強化を重視する場合

- ◆ 展開段階後半から
- ◆ 終末段階から

③どのような指導方法で

指導形態は？

- ◇ 教師主導の組み立てで
- ◇ 問題解決型で
- ◇ 相互の学び合いで

学習方法は？

- ◇ 体験学習、調べ学習などで
- ◇ 練習(ドリル)的な学習で
- ◇ 発見学習、探求学習などで

学習材は？

- ◇ 量や範囲を変えて
- ◇ 質や難易度を変えて
- ◇ 種類や対象を変えて

- ③ どのような指導方法で、習熟度別指導を行えば効果的かを検討しましょう。

●単元における習熟度別指導の位置付け

- 習熟度別指導は、県内多くの小・中学校で実施されています。
- 習熟度別指導は、単元全体を通して習熟実施するだけでなく、児童生徒の実態や教科の特質を考慮して、単元のどの段階で、習熟度別指導を位置けるかを検討し、工夫することが大切です。

H22年度
習熟度別指導の実施状況

小学校	93.8%
中学校	86.3%

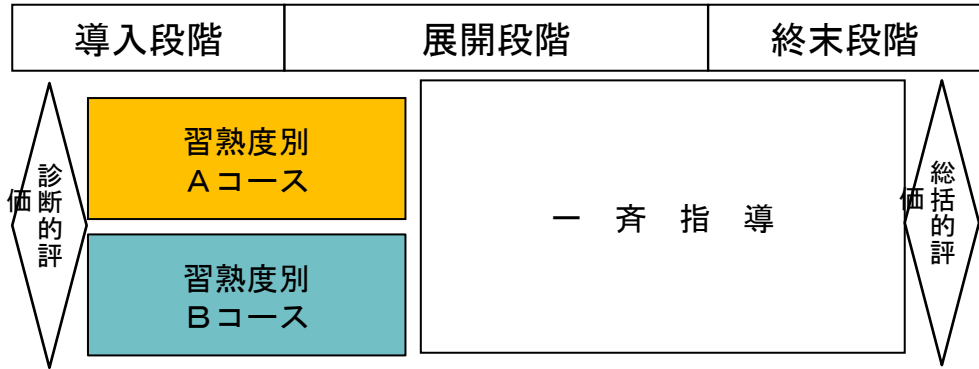
(H22年度福岡県教育課程実施状況調査)

単元における習熟度別指導の位置付け

◆導入段階から

新しい単元に入る前に、その学習の基礎となる知識や技能が十分に身に付いていない児童生徒がいる場合

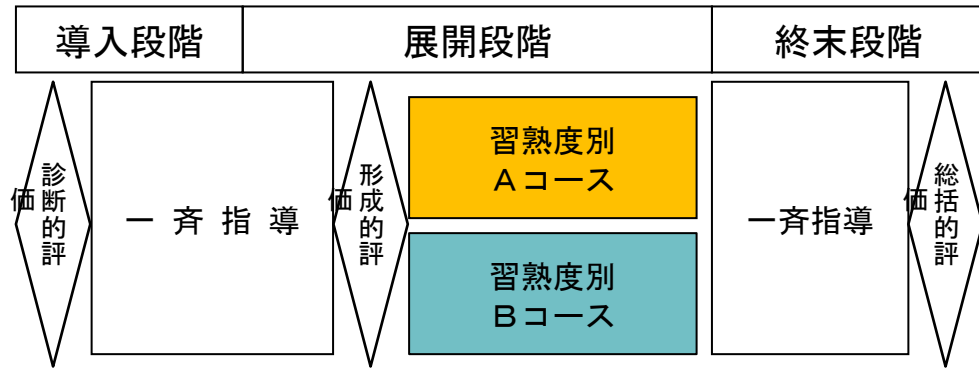
既習事項の振り返りなどを仕組む習熟度別指導を行う。



◆展開段階で

展開段階の前半までに学んだ内容や考え方で、それ以後の学習が自力で進められる児童生徒と、十分な支援が必要な児童生徒に分かれそうな場合

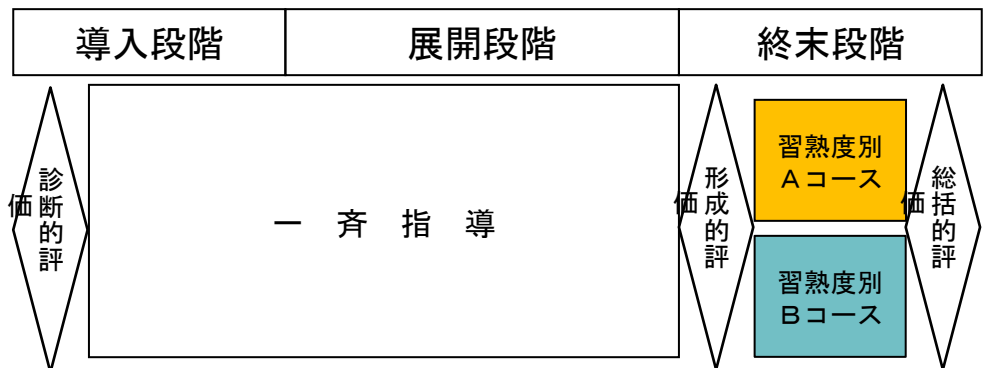
展開の段階で習熟度別指導を行い、終末段階で一斉指導を行う。



◆終末段階で

単元の学習を一通り終えた後の評価で習熟差が認められた場合

終末段階で習熟度別指導を行い、十分な理解と定着を図ることができなかった児童生徒に、きめ細かな指導を行う。

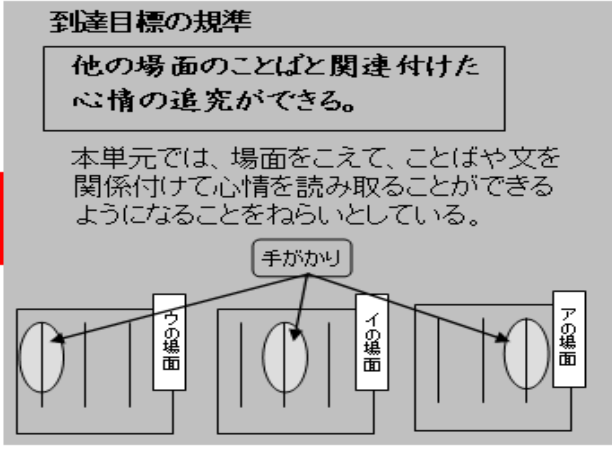
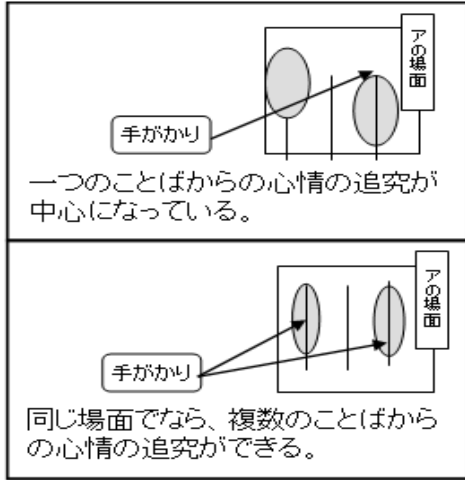


●習熟度別指導の計画の立て方

高学年 国語科・物語文の指導における習熟度別指導の検討例

① つまずきの原因を明らかにする。(どのようなところでつまずいているかを明らかにする。)

😊 児童の実態
(既習学習の単元末テストの分析等から)



😊 つまずきの把握 (どのようなところでつまずいているか)

場面をこえて、ことばや文を関係付けて読むことができていない。

② どの指導段階で

展開段階の前半までに学んだ内容や考え方を活用して、それ以後の学習において場面をこえてことばや文を関連付けて心情の追究をすすめられる児童と、そうでない児童に分かれそうな状況が予想される。

◆展開段階で

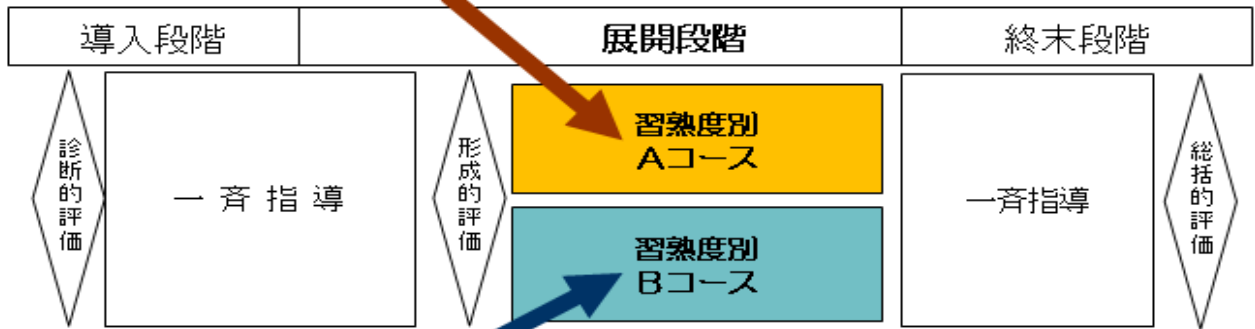
場面をつないで、読み進めていく学習の展開段階において、習熟度別指導を行い、場面をこえてことばや文を関連付ける指導を充実させる。

習熟度Aコース

展開段階の前半までに学んだ読み深め方で、それ以後の学習で場面を越えてことばや文を関連付けて心情の追究ができる児童のコース

③ どのような指導で

展開段階の前半までに学んだ読み深め方を活用して心情の追究をさせ、それを交流させる。



習熟度Bコース

展開段階の前半までに学んだ内容や考え方をどのように活用するか、場面を越えてことばや文をどのように関連付けていくとよいか、具体的に細かな支援が必要な児童のコース

学習の手引きやヒントカードを活用し、どんなことばをどのように関連付けたら心情の追究ができるか、きめ細かな指導をしていく。

③ どのような指導で